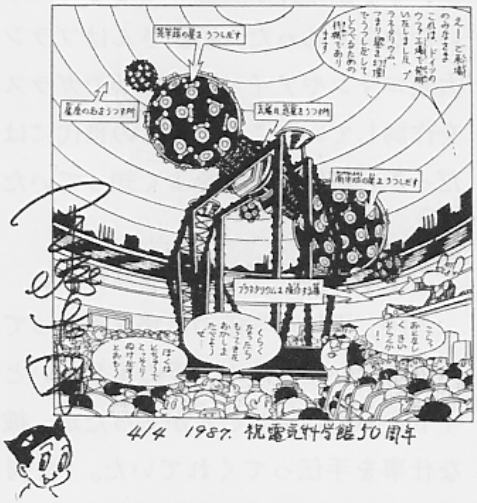
大阪市立電気科学館星の友の会「月刊うちゅう」(1989年3月号) より

■黒田武彦　「手塚治虫さんを偲ぶ」(1989)

O. TEZUKA

手塚治虫さんを偲ぶ

黒田武彦



私たちの世代では、子供のころ、まだ漫画は完全な市民権を得ているとはいえませんでした。漫画を見ている子は、悪い子、勉強のできない子というイメージが強く、漫画を買ってもコソコソと隠れて読んでいたという情況でした。そんなイメージを払拭してくれたのが手塚漫画であると誰もが認めているところです。言わば、私自身にとってだけでなく、すべての漫画ファンにとって偉大な師のような存在だったといえるでしょう。「鉄腕アトム」とか「火の鳥」といった漫画やテレビアニメを通して人々の心のなかにしっかりと根をおろし、その広がりはどんどん大きくなっていきました。

手塚さんが医学博士であるということと、漫画家であるということは、一見奇妙な取り合わせのように感じますが、手塚さんの漫画に一貫して流れている科学性と社会性、ヒューマニズムを見れば、その疑問は一挙に解決してしまうことでしょう。

星の友の会の月刊「うちゅう」に原稿をお願いしたのは、手塚さんが大阪出身で、お若いころによくプラネタリウムを利用なさっていたということの他に、その人間性に筆者がひかれていたことが大きな要素となりました。断られてもともとという気持がありましたが、何と執筆承諾のお返事をもらったのです。飛び上がらんばかりのうれしさだったことを今でもはっきりと覚えています。「懐かしのプラネタリウム」と題した手塚さんの文章は「うちゅう」1985年7月号の誌面を飾ってくれました。

そんなご縁もあって、電気科学館50周年の特別講演会の講師をお願いしようということにもなりました。これまた快く引き受けて下さったのです。東京の手塚プロダクションへ行ったり、電話で打ち合わせをしたりして準備を整え、1987年4月4日「電気科学館と私」という講演となったのです。漫画を描いていただきながらの講演は電気科学館50年の歴史を飾るにふさわしいものとなりました。講演後、宿泊先のホテルまでお送りする際、いろいろお話することができました。新しい科学館に導入予定のプラネタリウムのお話をしたところ、「それは残念です。プラネタリウムは鉄亜鈴型がいいですよ。ぼくはあれが一番だな。人間が話をするから機械が命をもつんですよね。」全く同感でした。そして「さみしいなあ。プラネタリウムが終わりのときはぜひ呼んで下さいね。とんで来ますから。」それももう果たせなくなりました。手塚さんの少年時代から刻み続けてきた電気科学館プラネタリウムの歴史が、手塚さんの死とともに終わろうとしています。「『うちゅう』に原稿が必要になったらいつでも言って下さい。それくらいは協力しますよ。」こう言って下さったあたたかい言葉が耳の奥に残っています。ありがとうございました、手塚先生。先生の代わりにアトムが、そして火の鳥がこれからも生き続けることと思います。

大阪市立科学館　ホームページ　スタッフ紹介ページ（2006）より

■手塚治虫と電気科学館（2006）

１．概要

大阪市近郊に生まれ育った手塚治虫（1928-1989）。少年期に開館間なしの大阪市立電気科学館（1937 年開館）に通いつめた聡明な科学少年であった。大阪大学医学部という難関大学を経て医師となり、医学博士号を取得して本格的に医業に邁進するかに見えたが、漫画家への夢を捨てきれず、ついに転身し、そして漫画・アニメという新しい表現手段の世界で第一人者となった。手塚と電気科学館との関係を概観する。

２．寄稿文、電気科学館 50 周年記念講演会

手塚は電気科学館の要請に応じて、星の友の会機関誌「月刊うちゅう」に思い出の記を寄せてくれた（1985、第 2 巻、No. 4）。その記事は本誌に再録しているのでご参照いただきたい。

この手稿は 1985 年であるが、その２年後、1987 年には電気科学館開館 50 周年記念行事があり、手塚治虫を講師に招き、プラネタリウム・ホールで講演会を開催した。

そもそもは、1984 年頃、イレブンＰＭという深夜のテレビ番組で、手塚が大阪の思い出の場所を巡るという企画があり、電気科学館のプラネタリウムにもやってきたことであった。それまで「手塚さんが昔よく来ていたらしい」という話は聞いていたものの、私たちが彼自身からそれを聞いたのはこの番組が初めてであった。そこで、黒田武彦さん（当時天文スタッフ、現兵庫県立西はりま天文台公園園長、兵庫県立大学教授）が原稿を依頼し、開館記念行事にも引っ張り出したのであった。当時、手塚は多忙を極め、それは世間にもよく知られていたことであったので、随分遠慮していたのだが、電気科学館の閉館も予想されていたので、この機会を逃しては二度とチャンスはないということで、黒田さんが大変な奮闘をされ、館首脳を説得してようやく実現に漕ぎ着けたのであった。

この手塚の文章から、私たちは「プラネタリウム」なるお菓子があったことを知るに至った（註１）。しかし、さて、今はどうなっているか、残念ながら知るすべがなかった。それがひょんなことからわかり、新聞掲載までされることになった話は次節に譲る。

講演会は大盛況であった。手塚ファンが駆けつけたのはもちろん、作家で作詞家の石浜恒夫さん（1923-2004）がお嬢さんの紅子さんを伴って来てくれたのは殊に嬉しかった。石浜さんは「月刊うちゅう」（1985 年 5 月号）に素晴らしい紀行文を寄せてくださっており、さすがに作家と思わせるその文章に僕はしびれていたからであった。石浜さんはフランク永井の歌った大阪ロマンやアイ・ジョージのガラスのジョニーなどを作詞していたことで僕らの世代には知られていた方だった。当然、手塚をよく知っていたはずである。

３．大阪銘菓『プラネタリューム』

当時、電気科学館の事務を手伝ってくれている丸顔の青年がいた。時々、手の足りないときなどにアルバイトをお願いすることがあったが、彼はそんな臨時的な仕事を手伝ってくれていた。「月刊うちゅう」に手塚の文章が掲載され、たまたま事務所でそんな話をしていたら、その彼がお菓子「プラネタリューム」を知っているという。どういうわけかを尋ねたら、それを家で作っていると言う。これに一同びっくり！　何たる偶然か！　しかし、偶然と思ったのは私たちの間違いで、彼は家業が電気科学館に関係していたことを知っていて勤める気になったのであった。本当の偶然は、その彼が勤めていた時期が手塚の原稿と重なったことであった。

こうして、その千成一茶の大原時子さんから、私たちには幻の銘菓「プラネタリューム」を頂戴し、1985 年 12 月頃、友の会会員一同と共にお茶会をすることになった。この模様は某新聞社が伝えるところとなり、手塚や昔のプラネタリウム談義に花が咲いたのであった。

こうして銘菓「プラネタリューム」の歴史もわかって下記の 1985 年 11 月の「月刊うちゅう」の記事となった（執筆は黒田武彦さん）。

大阪銘菓
『ブラネタリューム』について
編集部

「うちゅう」7 月号のこの欄は漫画家の手塚治虫さんに登場願いましたが、その中で手塚さんがプラネタリウムを見に来るたびに買い求めていた『ブラネタリューム』という菓子についてふれておられました。『やや長めのクッキーに、銀の砂糖粒を散らしてある。それがつまり星空というわけだった。ちょいと工夫をこ

らした何の変哲もない菓子』だったということです。この菓子は昭和 14 年から約２年簡、大原菓子研究所で製造されたフィンガービスケットであることがわかりました。『プラネタリューム』という名称は登録商標となっており、昭和 16 年には(株)三星社、昭和 26 年 9 月 26 日からは千成一茶と社名は変ってきましたが、実は『プラネタリューム』という名の菓子はまんじゅうに形を変えて生き続けていたのです。

大阪市都島区都島本通 2-11-11(TEL 6922-2010) の千成一茶本舗だけでしか販売されていませんが「宇宙時代の味」というふれこみ、なぜか心がときめきます。

この銘菓『プラネタリューム』については「月刊大阪人」2006 年１月号に詳しい紹介があり、当主大原時子さんが手塚との思い出などを寄せておられる。

なお、手塚と「プラネタリューム」、淀屋橋にある石原時計店社長・石原実さんのこと（手塚の手記を参照）などは下記のウェブページが詳しい。一度ご覧いただきたい。

http://www2.ocn.ne.jp/~norimi/

註１：その後、高城武夫著「プラネタリウムの話」(1954 年、本書で紹介）の 58 ページに「見学みやげにプラネタリウム絵はがき、大阪名勝名物“プラネタリウム”と銘うった粟おこしやケーキもあったり、“星座”と呼ぶお菓子も売られています」という記述を見つけた。

設計まで變へて
遊星儀のお膳立
市議説得に汗だくく
ご執心の市電氣局

大阪市電氣局がまだわが國には一氣科學博物館の屋上に掛付けたいといふので計畫中だつたが、これが掛付けのための設計變更がすつかりできあがつたので十三日、氣科學の標榜「プラネタリウム」(遊星儀)を、四つ橋に建設中の一電府建築課へ設計變更願を出すとともに、十七日の市會に提案するこ

ただ困つたが
……たゞにしろこのプラネタリウムの購入だけに大枚四十七萬圓も要るので、十三日午後三時から開かれた市會各派幹事會の席上、平塚電氣局長自ら行かくて說明をもとめたが、議員さんたちにこの正體が理解されてゐないので議論百出、休憩までした

結果、市會ではとくに二十七名の委員附託とした上、この熱心な音頭取、京大教授山本一清博士から全議員にもう一度ゆつくり腹にはいるやう說明してもらふことで治まつた

……なにしろこの代物はドイツのツ

アイス會社の世界獨占賣ときてゐるので三十萬マークいるく、諸設備を加へて邦貨約五十萬圓といふので木津谷電氣部長が驚倒になつてドイツ總領事ローデ氏から駐日ドイツ大使を動かし、とう〳〵邦貨四十七萬圓、七ケ年賦支拂にまで口說き落したものである

ところが四つ橋に建設中の電氣科學博物館の上にこれがために圓形の建物をつくると市街地建築物法

にひつかゝつて許可されないので涙を呑んで最初の設計の六、七階のスケートリンクを廢止し、こゝにこのプラネタリウムの圓形建物をつくるやう設計を變更したものである

收容人員は約三百五十人であるが、一回約二十四名宛にみせる、一日五回入れ替へ、一回平

均四十分間乃至一時間で夕方から夜拂曉までのあらゆる天體運行の狀況をみせるもので、入場料は大人三十錢、學生、生徒らが多かろうから一人平均二十五錢、一ケ年入場者、大阪城天守閣の約半分として三十六萬から四十萬人、一年均收入十萬圓となつて四、五年間で買つただけの金は取戻すといふ勘定である

歓迎されなかった？　プラネタリウム

左は昭和 10 年（1935 年）６月の大阪・朝日新聞の記事である。プラネタリウム導入案を市会に提案したかけたところ、内容の理解まで至らず、引き続き検討することになったことを伝えている。プラネタリウムを導入するには大金が要るし、建設中の建物の設計変更も必要だし、なぜそんなに電気局はご執心なのか、と皮肉っている。

関西中央紙などはもっと過激で、５月 31 日付けの紙面で「問題の“遊星儀”　市電気局が無理してまでもなぜ買いたがるのか」「説明を聞けば聞く程疑問あり」とし、プラネタリウムそのものに反対しているのではなく、「市電気局がすでに購買仮契約まで話をすゝめて市会を変則な議案で誤魔化さうとした」ことなどが問題だとしている。そうした事実があったことは確認されていないが、市会で取り上げられたのだろうか？　電気局は市税を使わないことを約束していたが、そんなお金があるなら他へ回せ、という主張もなされている。

実はプラネタリウムにご執心なのは京都帝大の山本一清教授で、購入を約束してしまってすでに東京に機械が届いており、それを大阪市へ押し付けようとしているという全くのデマ記事を掲載した新聞もあった。

市会で大いに議論になったのは確かだが、こうした報道とは違って議員はもう少し冷静だったようだ。マスコミにとっては報道しがいのある市会紛糾のネタと見えたのであろうか。